目白大学　文学・言語学研究
第1号　2005年1月　49－66

格助詞「へ」と「に」の分担領域

――時間と空間――

山西正子　駒走昭二

キーワード：「へ」　「に」　方向と帰着点　地域性

要旨：本稿は、しばしば論じられる格助詞「へ」と「に」の差異について、状況はわずかながらも変化し始めている可能性があることを、いくつかの事実に基づき推論するものである。結論として、以下の3点をあげる。

Ⅰ．方向・帰着点に関わる「へ」と「に」は、しばしば合理的な説明がしにくい程度にまで、使い分けが認めにくくなっている。使い分けは「規範」ではなく「傾向」とすべきであろう。東京から発信される、共通語とみなされる日刊紙や、いくつかの文学作品の表現ではこの現象が顕著である。一部では「に」の優勢も見られる。

Ⅱ．「へ」は、むろん空間的な方向をも示すが、新聞の見出しなどでは、時間的な方向を示す用法が顕著である。

Ⅲ．「に」は、かつて東京語の「へ」がもっていた、方向や帰着点に関わる空間を示す機能を引き受けつつあるが、同時に動作の実質的な主体を示す機能を、徐々に「が」に譲りつつあるなど、他の助詞との関連にも着目すべきであろう。

内容：0　問題点の存在
1　「へ」と「に」の共存
11　明治語の「へ」とその伝統
12　「へ」と「に」の「混在」
13　「へ」の外見上の変化 ――「への」の存在――
2　日本語教育の現状
21　韓国における指導状況
22　韓国語との関わり
23　指導法に関する提言
3　「へ」と「に」それぞれの変容
31　「へ」の時間的な方向表示用法
32　「に」の役割の増減
4　まとめ

やまにしまさこ：人文学部言語文化学科教授　　こまばしりしょうじ：名古屋高等学校非常勤講師

0　問題点の存在

稿者山西は、大学院留学生から、「母国で、方向や帰着点を示す格助詞の「へ」と「に」の差異について指導を受けたが、東京では、現実には、さほどの使い分けがあるとも思えない」との感想を聞かされ、意見を求められたことがある。

この点については、基本的には、田中章夫2002の

> 日本語教育などでは、方向を示すときは「北へ去る」のように「～へ」を使い、帰着点を示すときは「北京ニ着く」のように「～ニ」を使うということを強調する向きがあるが、これは、明治以降の東京語で「～ニ」と「～へ」が共存するようになってから生じてきた、きわめて微妙なニュアンスの違いにすぎない。…略…こんな微妙なニュアンスをとりあげるよりは、出身地によって「～ニ」を使う人と、「～へ」を使う人とがあると説明した方がよいように思う。

に尽くされていると考えたい。

端的な例のひとつとして、東京生まれの平岩弓枝（1932～）による『横浜慕情　御宿かわせみ27』（2000刊、文春文庫2003による）がある。本作品は、江戸情緒に満ちた（とされる）人気シリーズ「御宿かわせみ」の近作だが、顕著な「へ」優勢タイプである。

本作品の本文は39字×18行である。冒頭の68頁まで――単純計算で47,736字、会話文も多く実質は70％程度か――に「へ」は 128例ある（いわゆる手作業の一回調査による。以下同じ）。単純計算では 261字ごとに 1回、「へ」が出現することになる。

128例中、「裏木戸への道」など述語動詞が明示されない４例を除いた124例の動詞は、「行く」23例、「～て行く」６例、「来る」８例、「～て来る」18例、「出かける」６例、「帰る」７例など、移動性の強いものが多い。しかし「霊厳寺さんへ寄進する」「居間へ腰をすえる」「京極家の奥方へ奉公する」「お寺へ、お骨をおさめる」など、むしろ帰着点が重視されるものもある。

ほかにも、村松友視の『鎌倉のおばさん』（1997刊、新潮文庫2000による）は、「へ」優勢タイプといえる。村松は1940年生まれ、主な生育・生活圏は静岡県と関東地方で、長崎県出身の老女との接触はあった。本作品は、冒頭から「八幡宮の前を右へ曲がる／浄明寺へ向うバス通り／覚園寺へ出かける／風呂へ入る／Ｋ病院へ運ぶ／家へ出入りする」など、「へ」を多用する（むろん「に」もある）。村松のこの作品は、「出身地」との関連を示し、北九州的素地（11で詳述する）が強くなければ「へ」が優勢であることの一例といえる。

しかしながら、一方には、別の現実もある。すなわち、書き記された現代語の範囲で、

1）．書き手の出身地の別をこえて、「へ」よりも「に」が多用されるケースが見られる。

2）．「へ」は文字化される範囲内で、時間的方向を示す用法がしばしば確認される。

の２点が見てとれるからである。

われわれは、日常の口頭語において、しばしば、方向や帰着点を示す格助詞を省略する。日刊紙の例を示す。「朝日新聞」により、夕刊のみ「夕刊」とする。

（１）「学校のプール行ってくる――」　　（2004・７・30　35面「ののちゃん」）

（２）「バケツもってどこ行くの？」　　（2004・８・６　35面「ののちゃん」）

（3）左翼手の山本卓君が「おれんとこ来いよ」と声をかけてくれた。

（2004・8・7夕刊15面　福井県下豪雨）

のように文字化されても違和感はない。そのため、文章を書くときに、格助詞の選択に迷うことになり、そこで何らかの規準が求められることになる。現代語において、何が「規準」なのだろうか。一般的には、田中章夫2002が疑問を呈しているにもかかわらず「方向」と「帰着点」とでおおまかな使い分けをしているのでもあろうか。

1　「へ」と「に」の共存

11　明治語の「へ」とその伝統

湯沢幸吉郎1957の指摘するとおり、江戸語では、移動の意をもつ動詞と共起し、方向・帰着点を示す格助詞としては「へ」が多用される。明治時代以降の文学作品にもその傾向が顕著であることは、例えば夏目漱石の作品などで確認されている。ここでは、その周辺事情として、1）．長塚節は漱石以上に「へ」優勢タイプであること、2）．内藤鳴雪や小金井喜美子は「北九州圏」に属する一面もあるが、長期間の東京居住を経た晩年の著作については、「へ」優勢タイプであること、の2点を確認する。東京での「へ」の優勢は、地方出身者にも及んでいたと考えたい。ここでは「北九州圏」の「に」の優勢を指摘した靏岡昭夫1979にしたがって、考察を進める。

111　長塚節『土』の場合

靏岡によれば、江戸出身の三遊亭円朝による『牡丹灯籠』や、千葉県出身の伊藤左千夫による『野菊の墓』は徹底した「へ」優勢タイプである。夏目漱石は、松山や熊本に居住経験があるからか、徹底した「へ」優勢タイプではなく、ときに「に」を使う。

東京周辺での「へ」の優勢を、伊藤左千夫と同時期の長塚節で確認しておきたい。長塚節『土』（新聞掲載1910年、岩波文庫1970による）により、茨城県出身者の一例を見ておく。長塚節（1879〜1915）は、晩年、治療のため九州などに赴いたほかは、生活の根拠を他に移すことはなかった。

『土』では、さまざまな場面で、以下のごとく「へ」がきわめて多い。稿者山西（1946年生まれ、生育・通学・勤務地は神奈川・東京・埼玉のみ）の語感では「へ」がなじまず、「に」が適切と思われるものを、冒頭から順に10例示す。また現代語では「添加」の「に」に該当する「へ」を(14)、「に」または「を」になるであろう「へ」を(15)として示す。すべて「地の文」である。

（4）秤の先へ木の枝でこしらえた小さな鍵の手をぶらさげて…略…

（5）縄になう藁へ水を掛けておいたり…略…

（6）豆腐を出すたびに水へ手をさし込むのが、ふるえるように身にしみた。

（7）かさかさにかわいた手が水へつけるたびに赤くなった。

（8）幾たびか道ばたへ荷をおろしては休みつつ来たのである。

（9）(10)お品は手桶の柄へ横たえた竹の天秤へ身を投げかけてどかりとひざを折った。

(11)(12)天秤を斜めに横へ向けて、右の手を前の手桶の柄へ左の手を後ろの手桶の柄へ掛けて注意しつつおりた。

(13) お品は竈の前へ腰を掛けた。

(14) お品は白茶けたほど古くなった股引へそれでも先のほうだけ継ぎ足した足袋をはいている。

(15) お品はいつものように鶏などへ構ってはいられなかった。

長塚節は、作中人物の発話――大半は漱石のいう「最も貧しい百姓」のもの――には時に、北関東方言の「さ」「げ」を、「堀の中さ落っこちっかんな／さっき土手さ行く時」、「銭はみんなおめえげやっておくべ／肉刺なんぞ出たらば出たっておとっつあげいうもんだ」のように使用させている。しかし多くの場合、「菜は畑へ置きっ放しだっけべな／野田へは知らせてくれめえか」のように、「へ」が使用される。どこまでが現実そのままか判断できないにせよ、漱石の紹介で作家として世に出た長塚節は、典型的な関東人で、漱石以上の「へ」優勢タイプといえる。

112 内藤鳴雪・小金井喜美子の場合

霜岡は、「北九州圏」での「に」の優勢を示唆するが、愛媛県をもその圏内に想定している。俳人内藤鳴雪（1847～1926）は、松山藩士の子として江戸の藩邸で生まれ、1857年まで居住した。1871～1872年に短期間上京し、さらに1880年以降は東京に居住したことから、東京と松山双方の影響下にあるといえる。晩年の『鳴雪自叙伝』（1922刊、岩波文庫2002による）は、鳴雪は東京出身者とはいえないものの、「へ」優勢タイプである。本作品のうち、290～295頁の場所・方向を表す「に／へ」の状況を(16)～(27)に示す。「へ」は10例あるが、「に」は(20)(22)の 2例でともに「静止点」を表す。

(16)(17) 麻布長坂の別邸へ、行くようにとの事であったから、そこへ移った。

(18)(19) ここへ来ると文部省へは一里と十丁ばかりの距離であるが…略…

(20) 門前の空地に生い茂っているの葉を茹でて浸し物にする事もあった。

(21) 久保田少書記官が、神奈川、埼玉、群馬三県へ巡回する随行を命ぜられたので、…略…

(22) 私が県地にいて小学教育を督励していた経験では、…略…

(23) 田中文部大輔が法制局へ転任して…略…

(24) 私は文部省へ転勤したのであるから、…略…

(25) 上六番町へ家を借りて移転した

(26) 長女の順はもう小学校も終る頃になっていたので近傍の桜井女学校へ入学させた。

(27) 植村正久氏へは就中しばしば行って議論を闘わした。

このほか、「溝へ落っこちた／石橋の下へ隠して置いた／「直ちに品川へ向かって／屋敷外へ出る」など、「へ」優勢タイプといえる。ただし「家に入れられて／南に向かう」などもあり、徹底的な「へ」タイプではない。

森鷗外の妹小金井喜美子（1870～1956）についても同様のことが考えられる。霜岡は小金井の『浴泉記』（1894刊）での「に」の優勢を示し、出身地の島根県が北九州圏に含まれるためとした。

しかし、1873年上京、千住方面に住み、1888年越後出身の良精と結婚、本郷に居住した小金井の、晩年1956年の作品は『鷗外の思ひ出』は「へ」優勢タイプである。岩波文庫『鷗外の思い出』1999は、本文39字×15行×265頁で、実質75%として単純計算では116,269字。前半の118頁分（全体の45%）に「へ」は171例ある。計算上は303字ごとに1回出現することになり、多いと言える。

また、霸岡の判断規準となった「行く／来る」との共起の度合は、『浴泉記』——『明治文学全集81』筑摩書房1966刊所収本文では、32字×52行×39.5頁。改行も僅かで、実質90%として59,155字。『鷗外の思い出』の半分ほど——では「に」優勢であった（「へ行く」9例、「へ来る」2例：「に行く」27例、「に来る」14例)。これが『鷗外の思い出』では「へ」優勢になっている（「へ行く」59例、「へ来る」22例：「に行く」3例、「に来る」1例)。むろん他にも「外へ／庭に出る」「千住へ／家に帰る」のような混在は認められ、「へ」タイプに徹しているのではないが。

少なくとも鳴雪や小金井の年代までは、東京に一定期間居住すれば、生育歴に拘らず、「へ」に傾くことはあり得たと考えられる。東京での「へ」の優勢が確認できる。

12 「へ」と「に」の「混在」

「へ」と「に」の使い分けが、厳密かつ決定的なものでないことは、霸岡昭夫1979でも明らかである。霸岡の判断規準は、「行く／来る」との共起状況であるが、これ以外の動詞についても「へ／に」のいずれもが許容されることがある。そこに着目して若干の調査をおこない、「へ／に」の使い分けが、厳密かつ決定的なものでなかったことを確認しておく。

121 『通俗伊蘇普物語』(1873刊、平凡社「東洋文庫」2001による）の場合

本書は「イソップ物語」の訳本で、訳者は渡部温（1837～1898)。渡部は幕府御家人の子で、1862年蕃書調所の英学スタッフになった。渡部は江戸生まれだが父の勤務にしたがって少年期を長崎、下田、神奈川で過ごしており、江戸ことば以外の影響があることも考えられる。しかし本書は全国の小学校で採用されたことから、ここにみられる表現は一般的に許容されるものであったといえよう。『通俗伊蘇普物語』も「へ」優勢タイプである。

ところが、

(28) 鶴…略…長きくちばしを狼の口<u>に</u>さしいれ。ほねを引きぬき。さらば褒美を給はれと。丁寧に乞ひ求めたれば。狼目を瞋せ牙をむき出し。「ナニ。この恩しらずめ。汝(うぬ)は今狼(おれ)の腮(くち)<u>へ</u>首を入れたじやァねへか。夫を噬切(くひきら)れぬのは最僥倖(めつけもの)だ。…略…」と。のゝしり答けるとなり

（第三　狼と鶴の話）

(29) 犬。肉舗より肉一塊盗出し。引くはへたるまゝ溝をわたるとて橋の中ほどに到りたる時。其影の水<u>へ</u>写れるを見て。…略…夫をもまた吾ものにせんものをと。水<u>に</u>写れる肉にくらひ付しに。…略…

（第十八　犬と牛肉の話）

のように、同一の話に「へ／に」が共存していることからすれば、使い分けが、厳密かつ決定的なものでなかったことが知られる。

「出る」も「へ」と共起することが多いが、「沢畔に出て」「海辺に出て」があり、「へ」と「に」の使い分けは、規範ではなく傾向であるとみるべきである。

122 現代語に見る混在

『明鏡国語辞典』（大修館書店2002）など、多くの辞書が「へ」と「に」の部分的重複を指摘している。実例は枚挙に暇がない。日刊紙の同一記事における、「へ」と「に」の併用例を(30)(31)に示す。さらに同一ページを視野に入れれば(32)(33)など、極めて多い。

(30) 沖縄や福岡のように、空港から市街地が便利なところへ行くのは、…略…。各種通信が発達し、アメリカに行く飛行機の格安チケットの方が格安チケットの存在しない国内の離島に行くより安かったりもする現在、…略…。　（2004・8・7夕刊10面　島袋道浩「距離」）

(31) ロスランさんは、近所の人に声をかけ、猟銃を取って校庭に向かった。…略…制止を振り切って、校庭へ駆け込んだ人たちがいた。
（2004・9・4夕刊15面　ロシア小学校占拠事件）

(32) ＜写真説明＞2年連続の4強に進んだフェデラー（スイス）
＜本文＞ポール・ハンリー（豪）、杉山愛組は…略…8強へ進んだ。
（2004・7・1夕刊13面　テニス全英選手権大会）

(33) ＜中日＞5年ぶりのリーグ優勝へ向けて、勢いはとまらない。（署名　村上尚史）
＜西武＞プレーオフに向けて、細かいプレーの精度を上げる作業が残っている。（署名　稲崎航一）　（2004・9・13夕刊19面　プロ野球）

現代語のこのような状況にあっては、（0に示した留学生の期待したであろう）「へ」と「に」の使い分けの厳密な規準は、さらにいえば「出身地による傾向」は、指摘しにくい。方向・帰着点を示す格助詞の「へ」と「に」はしばしば等価といえる。極端な表現をすれば、しばしば「どちらでも許容される」のである。

13 「へ」の外見上の変化 ――「への」の存在――

12のような「へ」と「に」の混在状況を経て、現在、東京を中心とする共通語の中では、方向・帰着点を示す格助詞としては、かつての江戸・東京語での「へ」の優勢が失われ始め、「に」の進出、さらには「に」が多用されるケースも散見されるに至っている。人気作家といわれる文筆家の作品――登場人物に移動行為の多いものを選んだ――や、学生の文章から実例を示す。また「へ」が単独で使用されるほか、場合によっては「への」という連続で使用される度合のほうが多いことも指摘する。

131 内館牧子『愛しすぎなくてよかった』（1997刊、講談社文庫2001による）の場合――

内館は1948年生まれ、秋田出身、都内の大学卒業――

本作品の本文は41字×17行×301頁である。会話文が多く、実質的な数値は 209,797字の70％程

度かと考えられるが、この中に「へ」は23例しかない。実質70%を考慮した上で単純に出現度を計算（以下同様）すれば、146,858字中の23例で、6,385字に1回となる。

0で示した『横浜慕情　御宿かわせみ27』の冒頭 68頁での 261字に1回の出現度に比して、きわめて小さくなっている。

この23例の内訳は、「洋太郎への想い」のような「への」のかたちが12例で、この用法が最も多い。ほかには「女から女へ渡り歩く」1例、「レジへと持って行った」1例であり、「へ」が単独で（「から」とも共起せず）方向・帰着点を示すのは9例である。「外国へ行く／キッチンへ入る／広場へ歩き出す」などがある。そして、方向・帰着点を示す「に」が多用される。会話文の例(34)(35)と地の文の例(36)(37)を示す。

(34)「じゃ、必ず三人でフィレンツェに遊びに来て」

(35)「お前、一体どこに行ってたんだ」

(36) 二週間ぶりにオフィスに行くと、…略…

(37) 上條のそばに、和可子が寄ってきた。

このほか、「イタリアに派遣する」「闇の中に消えて行く」「レストランに向かって歩く」など「に」が使用され、「に」の優勢が顕著である。

「へ」は方向・帰着点を示す機能で数的には「に」に劣り、「へ」自身の中でも、単純に空間に関わるほか、「〜への想い」のように名詞句を作るために使用されることも多い。

132 石田衣良『うつくしい子ども』(1999刊、文春文庫2001による）の場合——石田は1960年生まれ、東京出身、都内の大学卒業——

本作品の本文は39字×18行×263頁である。会話文もあり、実質的な数値は184,626字の80%程度かと考えられるが、この中に「へ」は63例しかない（実質80%を考慮した上での単純計算による出現度は2,345字に1回)。その内訳は、「報道各社への電話連絡」のように名詞句を作る「への」が36例で、ここでもこの用法が57%を占める。上記131 内館牧子『愛しすぎなくてよかった』と同様に、「へ」は「への」のかたちで名詞句を作る用法が最も多い、といえる。

ほかには「門を開けて玄関へ。」のように述語を欠くもの4例、「県警広報課から報道各社へ第一報を伝える」のように「から」と共起するもの4例、「同級生の家へ遊びに行く」の目的の「に」と共起するもの1例で、「へ」が単独で述語をともなって使用されるのは18例（「へも」1例を含む）である。(38)(39)(40)として示す。

(38)「…略…もうひとり、市立小学校へまわしてくれませんか」

(39) 山崎は頂上へ早く着けるだろうと、傾斜のきついけもの道を選んだ。

(40) 常陸北家庭学校へマイクロバスで移送された。

単独例のうち3例は「むかう」であるが、「むかう」はしばしば「に」と共起している。また、単独例として「児童自立支援施設へ送致する」があるが、11行を隔てて「家庭裁判所に送致する」が使用される。動詞による「使い分け」は認めにくい。

そして、本作品も「学舎にむかう／教室に戻る／裏手に連れていく／家に帰る／(車が) ニュータウンにはいる／地上に届く／山頂に近づく」など、「に」が極めて優勢である。

なお、「への」が多い文学作品の一例として、篠田節子（1955年生まれ、東京出身、都内の大学卒業）の『カノン』をあげておく（1996刊、文春文庫1996による)。本作品の本文は39字×18行×401頁で、会話文もあり、実質的な数値は281,502字の80%程度と考えられる。ここでの「へ」は79例（単純計算による出現度は2,851字に1回）であるが、そのうち「への」は43例で54%を占める。

133 吉本ばなな『体は全部知っている』(2000刊、文春文庫2002による）の場合――吉本は1964年生まれ、東京出身、都内の大学卒業――

本作品の本文は39字×15行×171頁で、会話文もあり、実質的な数値は100,035字の80%程度と考えられるが、ここには「へ」は8例しかない。単純計算による出現度は12,504字に1回で、きわめて低い。内訳は「死への渇望」のような名詞句用法2例、「都心へとスピードをあげて走り出した」1例――かかっていく動詞は「走り出す」であろうが、隠された「急ぐ／向う」なども考えられる――、単独用法は5例、「行く／出る」2例ずつと「向う」1例である。

そして、ここでも、冒頭から、「宿に行く／道路にアロエがはみ出す／外に出る／家につく／ここに来る／家に帰る／中に入る」など、「に」が多用される。

吉本ばななは、殊に若い世代に支持されているという。この「へ」の出現度の低さは、若い世代の実態に多少なりとも共通するのではないかと考えられる。稿者山西は、近年、大学生の、方向・帰着点を示す「へ」の少ない文章に接する機会が増えているからである。

134 大学生の文章の場合

稿者山西の勤務する大学（埼玉県岩槻市）の学生の文章でも、「へ」より「に」が優勢である。簡単な調査結果を示す。調査対象は2004年4月15日の学生の文章である。対象者は81名（留学生7名を含む、大半は20歳以下)。「各自の日本語経験」をテーマとする、概ね200～400字程度の文章で、平均300字として24,300字程度と考えられるが、ここには「へ」は8例しかない。単純計算による出現度は3,038字に1回である。

その8例は、「学校へ行く」2例（同一学生)、「海外へ行く」1例、「おばあちゃんの所へ遊びに行く」1例、「日本へ来る」2例、「A校へ留学する」1例、「子供へのしつけ」1例である。

一方、移動を伴う動詞と共起する「に」は40例以上ある。すなわち、「福島／東京／地方など／どこの国／向こうに行く」5例、「日本に来る」5例、「社会に出る」2例（同一学生)、「埼玉に引っ越す」2例（同一学生）などである。この40例以上の中には、帰着点に重点があるために、「へ」は使いにくく、「に」が穏当と説明できる例もある。たとえば「出雲大社に集まる／小学校に入る／部屋に戻る／日本に帰国する」などである。それを考慮しても、「へ」が使用されにくいという点は動かせない。

大学生たちは、日常の口頭語の場合はしばしば0の(1)(2)(3)のように格助詞を欠き、書き記す

場合は「へ」より「に」を使用する傾向にあるといえるのではないか。

2　日本語教育の現状

これまで、方向・帰着点を表す格助詞「へ」と「に」の使い分けについては、2種類の要素、すなわち地域性と、「へ」と「に」の機能の違いが関わっていると説明されてきた。しかし、本稿の1の考察により、最新の状況については、その要素のどちらも、決定的な説明にはならないことが明らかになった。

日本語教育の場面でも、このことは問題で、学習者に「に」と「へ」の厳密な違いについて説明を求められることがしばしばある。これに関して、冒頭に示したように、田中章夫2002の、「機能の違いを強調するよりも地域性の説明のほうがよいのではないか」（要約）との提言もなされている。

日本語学習者が学ぶ「に」と「へ」の使い分け——現時点で東京を中心とする地域では「規範はなく、傾向があるにすぎない、さらにはその傾向すら揺らいでいるかもしれない」状況にある——はどのようなものであるのかを調査し、問題点を指摘する。

21　韓国における指導状況

韓国における、指導法や辞書を調査し、日本語の「へ／に」の使い分けが、十分に意識されていることを確認する。

211 韓国人日本語教師に対するアンケート調査

韓国人日本語教師に対して、2004年8月、郵送にて質問紙記入式のアンケート調査をお願いし、26通の回答を得ることができた。

対象は、韓国各地の大学校・高等学校の日本語担当教員・研究者である。日本語教育歴は、6～10年が11名、11～19年も11名、20年以上が1名、教育歴不明が3名であった。

調査内容は、「初級の授業において、次のような文例をどのように指導されていますか」とし、該当助詞部分を空欄にした九つの日本語文①～⑨（下記、①～⑥は叙述文、⑦～⑨は会話文）を示し、それぞれに対する指導法を、次の選択肢の中から一つずつ選んでもらった。①～⑨は、現代の日本語母語話者には、「へ／に」のいずれもが、程度の差はあっても許容されるものである。

a．（　）の中には「へ」を入れると指導している。

b．（　）の中には「に」を入れると指導している。

c．（　）の中には「へ」でも「に」でもよいと指導している。

d．助詞については、特に指導していない。

212 質問文と調査結果

九つの文例と、それぞれの調査結果は以下の通りである。なお、調査結果は、便宜上、「a」を

「へ」、「b」を「に」、「c」を「へ／に」、「d」を「不問」と置き換えて示す。なお、ここには、「d．助詞については、特に指導していない。」との回答はなく、指導者の意識の高さが知られる。

①　「デパート（　　）行く。」

結果：「へ」11名　　「に」0名　　「へ／に」15名　　「不問」0名

②　「昨日、デパート（　　）行って、買い物をした。」

結果：「へ」8名　　「に」10名　　「へ／に」8名　　「不問」0名

①によると、移動動詞「行く」を使った単純な文では「へ」のみ、または「へ／に」どちらでもよいという指導が行われ、「に」のみを指導することは（この調査に限っていえば）全くない。ところが、②のように「行く」動作の後で「買い物をする」という動作が加わると、「に」のみを指導する場合が最も多くなる。これは、①での「デパート」という場所が、「行く」行為の方向であるのか、帰着点であるのか不明であったのに対し、②では帰着点であることが確定したために、「に」を入れるように指導すべきだという判断がなされたためだと考えられる。

次に、必然的に帰着点を示すことが求められる動詞「着く」の場合について考察する。

③　「電車が、ソウル駅（　　）着いた。」

結果：「へ」0名　　「に」24名　　「へ／に」2名　　「不問」0名

④　「私は、ソウル駅（　　）着いた。」

結果：「へ」1名　　「に」23名　　「へ／に」2名　　「不問」0名

上記の①、②の調査結果から導かれた推測を裏付けるように、圧倒的に「に」のみの指導が増えている。これは、「ソウル駅」という場所が、明らかに帰着点であるからであろう。このことは③と④のように動作の主体が変わっても、影響を受けない。

これに対して、帰着点ではなく、離点に重点が置かれる移動動詞「出発する」の場合を考える。

⑤　「昨日、彼は、仁川空港から、日本（　　）出発した。」

結果：「へ」21名　　「に」2名　　「へ／に」3名　　「不問」0名

ここでは「へ」のみを指導する場合が圧倒的に多い。この文例の中に、「日本」が帰着点であるということを積極的に示す要素がないために、上記の①と同様に、「に」は用いられないという判断なのであろう。

さらに、必然的に方向を示すことが求められる動詞「向かう」の場合について考察する。

⑥　「その車は、海の方（　　）向かって行った。」

結果：「へ」14名　　「に」8名　　「へ／に」4名　　「不問」0名

これまでの推測に矛盾することなく、「へ」を入れるように指導するとの回答が最も多いが、「に」の場合も少なからず存在するのは、他の場合と異なる。

⑦　（AとBの会話）Aさん：「どこへ行くの？」

Bさん：「学校（　　）行くよ。」

結果：「へ」12名　　「に」6名　　「へ／に」8名　　「不問」0名

⑧　（AとBの会話）Aさん：「どこに行くの？」

Bさん：「学校（　　）行くよ。」

結果：「へ」5名　「に」17名　「へ／に」4名　「不問」0名

⑦、⑧は、Aさんの問いによって、Bさんが「へ」「に」のどちらを用いやすいかが、ある程度決定づけられる（①で確認したように、単純な文では「へ」および「へ／に」いずれでもよい、とされている）。そのため、⑦で「へ」を、⑧で「に」を入れるように指導している場合が多いのは十分予想され、実際、そのようになっている。

ところが、逆に、⑦で「に」、⑧で「へ」を指導している場合も無視できない。これは、一見、不可解である。そこで、あらためて⑦、⑧の組み合わせに注目してみると、ほとんどは、⑦、⑧ともに「に」、あるいは⑦、⑧ともに「へ」という回答である。

これらは、質問文すなわちAさんの表現とは無関係に、「学校」という目的の場所が示してあればとにかく「に」を、移動動詞「行く」を用いる場合はとにかく「へ」を、という意識が働いたためと考えられる。

方向か帰着点か、という規準とは異なる規準も、程度の差はあるにせよ、いくつか存在するということであろう。質問者の使用する助詞に合わせることも、目的の場所が明示されるか否かによることも、使用される動詞によることも、ときには、「規準」になり得るのである。

最後に、移動を伴わない動詞についても考察する。

⑨　「ここ（　　）サインしてください。」

結果：「へ」0名　「に」23名　「へ／に」2名　「不問」0名　（不明 1名）

ここでは、「へ」は、「へ／に」いずれでもよいという判断の2名のほかに許容されることはない。「サインする」という、移動性・方向性に乏しい、定着性の強い動詞であるため、「に」を指導すべきであると判断されるのであろう。

22　韓国語との関わり

日本語教育においては、やはり母語の干渉を考慮に入れなければならない。助詞で格表示をする韓国語の場合は、特段の考察が必要であろう。21の結果に基づき分析するが、ともに格助詞をもちながら、一対一の対応がないために、学習者はときに混乱し、指導者も殊に意識せざるを得なくなるのであろうことが、推測できる。

調査に使用した文例①～⑨のうち、「へ／に」どちらでもよいという指導がもっとも多くなされるのは①のみである。それ以外は、「へ」あるいは「に」いずれか一つを指導する場合が多いことが分かる。

「へ」のみと指導される場合が多いのは、⑤⑥⑦であり、「に」のみと指導される場合が多いのは②③④⑧⑨である。ここから、方向——「へ」：帰着点——「に」とする規範意識が窺える。

ここに韓国語の影響はあるのだろうか。朴垠貞1996の記述を示す。

日本語の「へ」格と「に」格は「動作」と「静止」の領域において共有する部分が広くなっている。…略…一方、韓国語においては方向という動的な場合は「lo」格を用い、存在という静

的な場合は「ey」格を用いる、…略…韓国語の「lo」格は到着点を表すことができないが、日本語の「へ」格は「に」格とほぼ同義で到着点を表すことができる。

（ハングル表記省略　稿者駒走）

本稿のここまでの考察のとおり、また朴の指摘のように、現代日本語では「方向・帰着点」を示す格助詞の使い分けが曖昧であるのに対し、韓国語は厳密である。この点に関して、両言語は異なる。すなわち、日本語の「へ」と、韓国語の「lo」、また日本語の「に」と、韓国語の「ey」は使用法が一致しないのである。

このことは、日韓辞典、韓日辞典の用例を見ても明らかである。例えば、『日韓・韓日辞典』（民衆書林1995）では、日本語の「へ」の語釈部分に「家へ帰る」「ここへ荷物を置いてはいけない」の例文が挙げられているが、その韓国語訳を見ると、前者には該当部分に格助詞「lo」、後者には「ey」が用いられている。そして、後者については、「“に”とほぼ同じ意味で用いる」という参考解説が付されている。

また、日本語の「に」には、「都に住む」「右に曲がる」の例文が挙げられているが、韓国語訳は、前者は格助詞「ey」、後者には「lo」が用いられている。日本語の「へ」「に」が、韓国語の「lo」「ey」と一対一で対応していない証拠である。

韓国の日本語学習者は、二重の規準を意識することになるのである。

このような関係にありながら、アンケート調査の結果からは、「方向→へ」、「帰着点→に」という意識が存在するように感じられるのはなぜだろうか。これは次のような背景に因っていると考えられる。すなわち、日本語の実態としては、「へ」と「に」は、方向・帰着点に関わる場合は使い分けに「規範」はない、あるとしても「傾向」でしかない。しかし、やはり、この2語は別語である。教育の場においては、その違いを明確にしておいた方が扱いやすい。

これは日本語教育に限らず、日本国内の国語科教育においても同様である。ただ、国内の国語科教育の場合、国文法で「へ」と「に」の使い分けを指導したとしても、それが厳密なものではなく、傾向にすぎないことは、学習者の内省や、現実の言語生活によって、ただちに理解される。

しかし、外国での日本語教育は事情が異なる。韓国の場合、日本語の「へ」と「に」の使い分けの「傾向」が、韓国語の「方向→lo」、「存在→ey」という「規範」と都合よく対応するため、「へ」＝「lo」:「に」＝「ey」という関係式が「都合よく」成り立ってしまい、そこに「傾向」から「規範」へのすり替えが生ずるのであろう。この「すり替え」が指導者の意識に反映されていると考えられる。

23　指導法に関する提言

厳密な規範が存在しない場合の指導は容易ではない。「へ」と「に」の場合もその典型である。現時点では、初級段階の指導としては、動詞を基準に例文を選別し、使い分けの傾向を「漠然」とながら感じとらせる、学習が進んだ段階で学習者の疑問に答えるかたちで、「現代の日本語では、許容範囲が広い」ことを指導すべきであろうことを提言する。

231 「へ」と「に」に関する指導の必要性

初級の段階で「へ／に」いずれでもよいと指導するのは、何らかの「使い分けの傾向」があることを無視していることになり、現実的ではない。富田隆行1991が指摘する事実であるが、「どちらにいらっしゃいますか」と「どちらへいらっしゃいますか」の区別は、「へ／に」の選択に大いに関わる。

日本語の「へ」と「に」は別語である。＊「子どもにの贈り物」＊「ここへ本がある」は許容されない。したがって、この2語が別語であることは確認しておく必要がある。

とはいえ、「方向→へ」かつ「帰着点→に」を「規範」として厳格に指導した場合、学習者が現実の日本語に接し、規範に合致しない多くの実例に出会って、無用の混乱を生じかねない。また、韓国語を母語とする学習者に対して、単純に「へ」＝「lo」、「に」＝「ey」と指導するのも言語学的に問題がある。

232 指導法に関する提言

231をふまえると、現実的な指導法としては、以下のことが考えられる。

初級段階では、詳細な説明を省略し、動詞を基準に例文を列挙し、「傾向」を感じとらせる。すなわち、「行く」「出発する」などの動詞と「へ」の共起する文、また「着く」「サインする」などと「に」が共起する文を列挙し、慣れさせる。

学習が進んだ段階で、「行く」と「に」、「着く」と「へ」が共起する実例に接した学習者から説明を求められたとき、それらも実際には許容されることを指導すればよいのではないか。このような認識修正は、「初めに教え込まれた規範」の修正ではないため、比較的容易に行われるのではないだろうか。学習者の習熟度に合わせて例文を選択することが重要であると考えられる。

この、動詞を基準として選択された文を列挙し、広く行われている用法に慣れさせる方法は、格助詞をもたない中国語などを母語とする学習者にも有効ではないか。

3 「へ」と「に」それぞれの変容

31 「へ」の時間的な方向表示用法

本来、空間的な方向を表示するものであった「へ」が、現在、書き記される範囲で、時間的な方向を表す用法が顕著であることを示す。「へ」を文字として受容するとき、「へ」は単独で、本来的な、空間に関する方向・帰着点を表すための用法のほか、かたちの上では「への」という複合形式（31で既述）、用法としては時間的方向を表すための用法が無視できなくなっていることになる。なお、見出しの「へ」が「未来形」を意味する、字数節約のための便法であることは、石井庸雄1997に示されている。

311 「へ」の大きな機能——見出しに見る——

杉村泰2004は、「エアポートからエアシティへ」のように「へ」で終わる文を分析し、現代語の

「へ」には、「未来志向的な用法」があるとする。杉村は、「へ＝過程重視／に＝結果重視」の立場をとっている。本稿は、日刊紙の見出しの用法から、「へ」が、杉村のいう「未来志向」も含めて、時間的方向を表す機能を前面に押し出していることを指摘したい。「へ」は「～の状況を目指して」を表し、これから到るべき空間のみならず、状況とも共起することになる。時間的方向用法といえるであろう。以下に例を示す。朝日新聞2004・9・1付けの全例である。

(41) 橋本氏ら3氏の証人喚問要求へ　　(4面　日歯連事件)
(42) 中国の演習中止で台湾も取りやめへ　　(7面　台湾軍事演習)
(43) テロ警戒、会場輸送で来日へ　　(7面　ツェッペリン号)
(44) 交付税改革へ対立鮮明　　(10面　経済諮問会議)
(45) 食品向け容器可能に／環境へ低負荷　　(12面　植物樹脂)
(46) 一面的な価値観への問い　　(29面　ラジオアングル)
(47) 真壁会長が退任へ　　(31面　連合神奈川)
(48) 保養所廃止など66議案を審議へ　　(31面　川崎市議会)
(49) 海への人出 161万人増　　(31面　県警地域総務課)
(50) カジノ解禁へ部長級が協議　　(31面　地方自治体カジノ協議会)
(51) 日本への搬送作業始まる　　(35面　中国国宝展)
(52) 久米宏さんラジオで復帰へ　　(37面　ニッポン放送出演)
(53) 踊り・倒立、運動会へ気合い　　(37面　がっこう2004)
(54) 陸自に「狙撃班」新設へ　　(38面　市街戦を想定
(55) 重機派遣へネット　　(38面　きょう防災の日)
(56) 52億円没収へ　　(39面　ヤミ金資金)

それぞれの本文によれば、(41)は証人喚問要求を目指して行動すること、(42)は演習中止を目指して調整していくことが明らかで、「へ」は時間的方向を表す。「へ」は時間的推移を伴って実現される状況を意識するときに使用される。「へ」は空間のほか時間とも共起し、その用法は、見出しという場面では軽視できない。

なお「へ」の前接語を整理すると、具体的空間は「海」「日本」の2語、具体性のない「環境」のほか、「要求／取りやめ／来日／改革／価値観」など抽象的な語が多い。

日刊紙の見出しは、日常の口頭語と同一ではない。しかし、簡潔かつ誤解のない表現であることは要求されているのであり、日常語と乖離しているものではないだろう。見出しは、「へ」がもつ、時間的推移とも、抽象的な語とも容易に共起する側面を表すものではないだろうか。抽象的な語との共起については、次の312でも言及する。

312 「への」の多用

次に紙面全体の「へ」を観察する。朝日新聞2004・8・1付けの全例である。旅行社の広告にある旅程表の「トロントへ」なども含めて、計178例を確認しえた。

本文記事では、教科書的用法——具体的な空間と共起し、述語も明示される——も健在である。字数節約が強く求められる見出しとは、多少事情が異なる。

(57) 長嶋監督が現地へ行かない場合も、登録を変更しない方針。　（1面　アテネ五輪）

(58) 華々しく海外へ移籍したが、出場機会に恵まれなかった。　（17面　サッカーＧＫ川口）

ここで注目すべきは、「への」の存在である。確認しえた178例中、「への」は74例である。見出しの「台風10号、日本海へ」のような述語省略例69例、(57)(58)のような単独かつ述語を省略しない、いわば基本的な用法35例のいずれをも上回っている。この日に限れば「最大勢力」といえる。少なくとも、書き記される日本語として無視できない存在である。日刊紙やその他の文を読む限り、この判断は、一斑を見て全豹を卜すものではないと考える。

具体的には、「条文ミスへの対応／民主化への第一歩／低所得者への影響／国民への冒涜」（いずれも３面）のように、空間と関わらない、しかも「堅い、おとなの語」と共起する例が多い。

日常の言語生活を観察するとき、「への」は「にも」「には」などの結合とは異なり、幼児も使用する一般的形式ではない。しかし、おとなの場合、口頭語として、ときには可能な形式である。**13**に示した文学作品でも、会話文の中に用例がある。(59)は 131の、25歳女性会社員が友人のなつみを守るために同僚男性中島に訴える「直談判」の例、(60)は132の、中学校長の生徒に対する質問の例である。

(59) 「わかるでしょ、なつみは中島さんへの思いを断ち切るためにフィレンツェに行って、
　　それでようやく自分の道を見つけたの。…略…」

(60) 「三村君、きみは…略…今回の事件への本校の対応をどう思う」

「への」は、字数節約のために、日刊紙が積極的に使用する側面はあるだろうが、作品に多用する文筆家もあり、おとなに限れば、非日常語ではない。「へ」が、しばしばこのかたちで出現することは現代語の一面として軽視できなくなっていると考えられる。

この「への」が、いつどのようにして広まった（広まりつつある）かは、考察していないが、日刊紙の「への」の多用と全く無関係に進行したか否かは今後、検証したい。

32 「に」の役割の増減

近年、個人によっては、東京出身者でも、「へ」を多用せず、ほとんど使用しない場合がある。そのとき「に」が「へ」の方向・帰着点を示す役割を分担することになる。しかし、「に」は役割増加に対し、一部の役割を他の助詞に譲り渡し、バランスを保とうとしている部分もある。この点を確認していく。

321 「に」と実質的な動作主

「に」は、実質的な動作主を表す。「太郎に歌わせる（歌うのは太郎）」、「太郎に泣かれる（泣くのは太郎）」、「太郎に分かる（分かるのは太郎）」のような場合である。　しかし、山西・駒走2004が指摘するように、動詞「分かる」については、近年、伝統的な「太郎に～が分かる」形式のほか、

「太郎が～を分かる」形式も安定的になっている。実質的な動作主を、「に」のみによらず、「が」で示すことも許容されるに至っている。このことは、「に」にとっては、「負担の軽減」ということになる。

322 「に」と受益表現

菊池康人1994が指摘するように、近年、「Aさんが地図を書いていただいた」を、Aさんからの恩恵表現とする「誤用」がある。一般的には「に／から」であるが、菊池の指摘にもかかわらず、10年後の今日、「誤用」は誤用といえないほどに、広く使用されている。

また「太郎が行ってもらいたい／優秀な受験生が来てもらえる」のような表現もときに行われる。

これらを、「いただく」と「くださる」の、「もらう」と「くれる」の混乱と見ることは可能であるが、「が」と「に」の混乱でもある。共通するのは、321の場合と同様、実質的な動作主を、「に」によらず、「が」で示す方向である。受益に関わる表現の「下さる」「くれる」は、現在まで、動作主は「が」で示されてきた。それに準じて、「実質的な動作主は「に」によらず、「が」で示す」という、ある種の、「記憶の負担軽減のための整理」がなされつつあるといえるのではないか。

323 その他の事例――「に」と「から」および「に」と「が」

稿者山西にとって「犬から噛みつかれた」「猫から手を舐められた」は違和感のある表現である。具体的な動作に関わる受身文の場合、動作主が「から」で示されることはない、「に」（文体によっては「によって」）が適切であると考えていたからである。むろん、「お客さんから噛みつかれた／対戦相手から舐められた」は「抗議された／見下された」の意味で、具体的な動作を伴わない、心的な動作の主体として許容できる。

しかし、

（61）容疑者が…略…署員から短銃で撃たれた事件で、…略…

（2000・8・25夕刊　23面　警察官発砲）

について、周辺の学生に違和感の有無を質問したところ、「ない」との判断が多数であった。上記の「噛みつく／舐める」の例を説明した結果、「たしかに、そういわれれば、そのような傾向はあるかもしれない」との発言には至ったが、「違和感はない」は撤回されなかった。受身文の実質的動作主に関して、「に」と「から」の使い分けについては、稿者山西と、山西の周辺の学生および例示した記事の記者とは、別の規準によっている。ここでも、「に」の専有領域に「から」が進出していると考えられる。

動作の起点という観点から見れば、「に」は「から」より、「使いにくい」点がある。例えば、「本を借りる」ばあい、「太郎（友人）に借りる」は可能であっても、「図書館に借りる」は穏当ではない。かつ「図書館で借りる」は可能だが「太郎（友人）で借りる」は許容できない。これを、「から」に一本化することは可能である。「太郎／図書館から借りる」と整理すれば、「借りる」は「から」と共起するとして、記憶の負担軽減となるだろう。

このほかにも、「太郎にそのようなことが言えると思いますか」の場合は、「太郎」が可能の主体として「言える」のか、太郎以外の人物が太郎に向って「言える」のか不分明である。「太郎に本をもらってきた」も同様で、「太郎のために、だれかから」もらってきたのか、太郎が本の提供者なのか不分明である。

このように、極めてささやかな事例ながら、「に」の周辺には、問題がある。

「へ」と「に」のいわば、「勢力関係」に変化が生じているとしても、「に」は同時に他の助詞との間でも、何らかのかかわりを持ち続けていることも、考えていきたい。

あるいは、「に」は、「が」や「から」と共有していた役割をそれぞれに譲りはじめており、一方で、かつての東京語では「へ」が分担していた、方向・帰着点を表す役割を、引き受けつつあるのではないか。

空間の表示に関して、継続動作がなされる場合は、「に」によることはなく、「で」がほぼ全面的に分担している。「青年期、パリに絵画を学ぶ」はもはや一般的ではない。

静止状態は「に」が負担しつづけている。とすれば、最終的に「静止」が想定される、方向や帰着点に関して、「に」が引きうけることは、全く接点のないことでもない。

4 まとめ

本稿は、冒頭0の外国人大学院生の質問と、134で示した、稿者山西の接している現実とを出発点としている。日夜、話され、書き記される膨大な量の「へ」と「に」を数量的に整理することは不可能である。したがって、ここで示した数値は、すべての現実の中では、意味をもたない惧れも十分に考えられる。

しかし、11で見た、東京での「へ」優勢の時代から、12の「へ／に」混在状態への変化は否定できず、さらに13のように、一部では、東京とその周辺でも、「に」を多用する、「へ」の出現度が低い文学作品や文章が存在するに至っていることは確認できた。また2の考察から、「へ／に」については日本語教育の場面でも、模索が続いていることが分かる。使い分けが「規範」ではなく「傾向」でしかないことの反映であろう。

現在、共通語の普及で、言語の地域性は、ことに書き記される言語の場合、失われやすくなっている。ことに全国紙では、記者の言語背景の特定は、ほぼ不可能である。かつては地域性で説明できた事実が、それだけでは不十分になっている。

その中で、少なくとも「混在」、さらに一部では「に」の優勢という事実は認めなければならない。むろん将来的な予測はできないが。

そして、そこには、「へ」が時間的方向を示すために使用されるケースが無視できなくなったことと、「に」をめぐる役割分担の問題——「に」と「で」に関しては平安時代から始まっている——が存在していることを想定しておきたい。

［参考文献］

石井庸雄 1997　「言葉と世相」　朝日新聞　1997年5月9日　夕刊3面
菊池康人 1994　『敬語』　角川書店（講談社学術文庫1997による）
杉村　泰 2004　「格助詞「へ」に見る近未来都市」『都市と文化』　名古屋大学大学院・国際言語文化研究科
田中章夫 2002　『近代日本語の語彙と語法』　明治書院
霜岡昭夫 1979　「近代口語文章における「へ」と「に」の地域差」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』　勉誠社
富田隆行 1991　『基礎表現50とその教え方』　凡人社
朴　垠貞 1996　「日本語の方向性格助詞「へ」と韓国語の方向性格助詞「lo」の対照研究における問題点」『ニダバ』第25号　西日本言語学会
山西正子・駒走昭二 2004　「動詞「わかる」と格助詞――実態と規範意識――」『目白大学人文学部紀要』第11号
湯沢幸吉郎 1957　『増訂江戸言葉の研究』　明治書院